

量を表す目的語を伴う仏語 *couper* と 日本語ワル、キルの意味論的考察

伊 藤 達 也

0. 序

仏語の動詞 *couper* は日本語の切ルと語彙的に等価と見なされることが多い¹。しかしながら *couper* の用例の中には意味上、別の日本語動詞、割ルと近接する文脈も存在する（例：*couper le vin*（訳：ワインを（水などで）割る）²）。本論は仏日語のこの興味深い類似を出発点としながら、*couper*、キル、ワルという三つの動詞の用例の多様性と、それに伴う多義を通じての各動詞の不変的アイデンティティを考察することを主題とする。

論文の構成としては、まず *couper le vin* および「ワインをワル」という表現が感じさせる違和感、つまり液体を「キル」ということはどういうことかを概念レベルで概観し、次にそれぞれ個別に三つの動詞の用例を見ることにする。最後に、言葉は使用される環境との相互的な影響関係の中で意味を絶えず作り出しているという仮説を提示し、意味が参照される行為から把握しやすい基本的な動詞の場合でさえ、(外国語を理解する場合は特に) 前後の語彙的な環境を考慮して意味を理解する必要があることを確認する。

1. 液体を「切る³」とはどういうことか？

液体を「切る」ことは、現実社会では物理的には不可能であると考えられる。しかし言語学の分野で言葉の用例を調べる場合、現実社会においての可能性とラング⁴においての可能性、つまり物理的な可能性と語彙の使用可能性とは別である。とはいえ、両者を完全に区別することができないのは、現実世界への指示性を備えた自然言語を考える場合の厄介な特質である。

「切る」場合、あるいは「切る」という言葉を使用する場合いずれにおいても、「切る」対象は直感的に固体であることが前提とされる。例えば「*水を切る」が不可能で「氷を切る」（と言うこと）が可能であるのは、それを証明する。水は凝固している限りにおいて、例えば氷屋がノコギリなどで「切る」、つまり対象を切断する行為を実行できるのである。ここでは事と言は一致している。

しかし他方、気化した水を「切る」こと、つまり「飛行機が雲を切って飛ぶ」「車が濃い霧を切って進む」などと言うことも不可能ではない。この場合対象は気体であり、物理的に「切る」ことはできないが、濃度（密度）が高い場合のみ、「切る」と言えるのである。事と言とはここで分離を始める。

伝統的には、この種の用例は比喩（メタファー）と説明される。あたかも固体を切るように対象に分け入っていく様を表現した文学的表現と考えるのである。ところが、水蒸気よりもはるかに固体的な対象、「*泥を切る」、「*土を切る」などと言にくいのは何故であろうか？「*砂糖を切る」、「*小麦粉を切る」なども、たとえ比喩としても使いにくい。このように、たとえ比喩的な表現といえども、動詞が要求する目的語の性質には制限が加わっており、ある性質を備えている目的語とでなければ「切る」という動詞は使用できないのである。

別の例を考えよう。「指を切る」は、二通りの解釈：(a)負傷する(b)切断

する、が可能である。しかし特殊なコンテキストがない限り、(日仏両語において) (a)の負傷の解釈が支配的である。この場合「切る」が使用されても、切れたのは皮膚の表面のみで、傷口は後に元通りになることが予想され、対象が分割されることは含まれない。この例からも分かるように、「切る」には必ずしも対象の分割が含まれる訳ではないのである。

またフランス語でも日本語でも一致して、トランプを「切る」ことができる。「トランプを切る」または *couper les cartes* は、結果的に「混ぜる」という意味になる。カードは薄い紙状の物体で、切断することも不可能ではないが「トランプを切る」と「紙を切る」場合とは「切る」の意味が異なる。この例から目的語であるトランプの性質からの影響を受け、「切る」の意味が普通関連づけられる意味から変化していると考えられる。

以上導入的に、日仏語において重なる部分のみを見ても、普通我々が直感的に「切る」に結びつける「切断」の意味と異なる用法が存在することが確認できた。本論ではこのような語彙の使用制約から「切る」諸動詞の本質を考察し、その用法の多様性の中で多義を統括する不変的アイデンティティを見つけることを目標とする。またさらに、動詞の意味の多様性が生じる原因を明らかにし、多義性の中の規則性を抽出することを最終的に目指す。

2. 理論的立場

記述に先立ち、本論の依拠する理論的な立場を明確にする必要があるように思われる。動詞の多義性に対するアプローチを4種類に分類している Jean-Pierre Desclés の分類に添いながら我々の立場を位置づけよう (Desclés 2005 : 111) :

- (1) 異なる統語的な構築に対しそれぞれ別の動詞が存在するとする (Maurice Gross のような⁵⁾ 立場。

- (2) Wittgenstein の見解⁶に基づき、「*effet de sens* (意味の効果)」に固執し、言葉はそれ自体として意味を持たず、意味は文脈的な環境によってしか存在しないとする立場。
- (3) 動詞は第一の意味 (例えば具体的な意味) を有し、他の意味、より抽象的な意味、比喩的な意味、メタファー的な意味はそこから派生するという立場。
- (4) 仮説として、ある動詞の様々な異なる文脈でのあらゆる使用を超越する「本源的意味」を措定する立場。

Desclés (ibid.) は自分自身の立場を(4)であるとしながら、さらに続けて(4)の立場には3つの認識論的に異なる態度を認めうると言う：

- (i) 「本源的意味」が(ソシユールの意味での) ラングの中で定義できると考える立場。
- (ii) 「本源的意味」が分析的に要素的な述語に還元して定義できると考える立場。
- (iii) 多義的な動詞の「本源的意味」は本質的に認知的な性質を持ち、そこから生み出される意味は、スキームを使用して記述され、明示的な依存関係によって、意味の不変部分から生み出されるとする立場⁷。

Desclés 自身、自分の立場はこの中の(iii)に属すると言っている。本論の立脚する立場も、TOPE⁸の影響から出発しているため本質的には同じ態度を共有し、(4)の(iii)に属すると言ってよい。すなわち我々の立場は、(1)と異なり「切る」動詞の様々な用法に対応する複数の同音異義語があるとは考えない。また(2)とも違い、語彙に意味がないとする極端な立場はとらず、語彙「切る」には何らかの核となる意味が措定でき、その核は出現環境を統括する性質をも備えていると考える。また(3)とも異なり、

抽象的な意味、比喩的な意味、字義通りの意味の階層的な区別を設けない。意味の核から、様々な出現環境での文脈に応じて、意味が絶えず組み立てられると考えるのである。

他方、(i)や(ii)との違いは、我々の立場では、意味の核は、自然言語やそれから抽出した、よりミニマルな要素の組み合わせで定義できるとは考えず、用法の多様性を通じて存在する *forme schématique* (フォルム・シエマティック以下FS)⁹として表象される。このFS自体はどの具体的な意味にも対応しない。FSは出現環境において文脈からの入力を受ける事で初めて意味を生産すると考えられる。またFSは、抽象的な形式であり、言表行為の際に *déformation* (デフォルマシオン)¹⁰というプロセスを経ることができる。文脈に存在する語彙、*co-texte* (コテキスト)¹¹または、統語的な帰属などが、FSのパラメーターの布置を變形しうるのである。この變形の視座を導入する利点は、理論的である以上に実際的なものであり、より多義性を説明しやすくなる点にある。とりわけ、統語的な要素の語彙への影響はデフォルマシオンにあると考えられる¹²。

以下において、*couper* とキル、ワルのそれぞれの記述に入り、個別的にこの理論がどのように記述的な有効性を持っているのか見ていく。

3. *couper*

『小学館ロベール仏和大辞典』では、フランス語の動詞 *couper* の他動詞用法に27の意味を載せている：

1-1...を(刃物類で)切る、切り取る、刈る。1-2(体の一部を)切断する、切除する。1-3(の体の一部)に切り傷を負わず、切るような感じを与える。1-4(型紙に合わせて)(服)を裁つ、裁断する。1-5(文章など)を削除する、(の一部を)削る、切り詰める。1-6(布)を擦り切れさせる(皮革に)ひびを入れる。1-7(動物)を去勢する。1-8(鉱山の岩盤面の凹凸を直すために)坑道面を削る。1-9 陶芸の

練り土を糸で切る。1-10石膏に装飾(くり形)をつける。1-11 版画の木版に鑿で線刻する。1-12 厚紙を断裁する。

2-1...を分ける。分割する。2-2 (分けすぎて) 調和を乱す。...に、ちぐはぐな印象を与える。2-3...を横切る、と交差する。2-4 ある全体から(何か)を切り離す、孤立させる。2-5 (道路、交通などを) 遮る、遮断する。2-6 (電気、通信などを) 止める、切る。2-7 (活動など)を中断する。2-8 (生理現象などを) 抑える、止める。2-9 (文章などを) 区切る。2-10 (飲料などを)...(で) 割る、(特に)を水で薄める。2-11 カードをカットする。2-12 数学、(一つの集合が他の集合と) 交わる(立体の) 切断面をつくる。2-13 馬が水を飲むのを抑える。2-14 (競争相手の進路)を妨害する。2-15 狩猟動物の通過した通り道を横断する。

この意味を見る限り(我々が関心を持つ2-10を除いては)ほぼ日本語の「キル」という動詞と重ねて、主語や目的語に応じてその意味の広がりを推測する事ができる。しかし日本語の「キル」にはある、「100メートル走で10秒をキル」などの用法はフランス語の *couper* にはなく、日本語の等価語彙よりも使用範囲は狭いと言える。

3-1 *couper* の語源

Le Grand Robert, dictionnaire de la langue française (以下 GR) によると、*couper* の語源は、11世紀の *colper* であるとされる。これは *colp* (現代フランス語の *coup*) から派生した動詞であり、語源的な本義は「*coup* (一撃)によって分割する」ことである。この語源と語源的な意味に対しては他の辞書類もおおむね一致している。

例えば *Robert Historique de la Langue Française* (以下 RH) も *coup* の意味として *choc qui divise* (分割する衝撃(ショック))を想定し、そこから *couper* の切るという意味が生じたとする。このように現在使用される *couper* の意味は元の名詞 *coup* の意味からかなり離れている。*couper* が誕生したと

きにはラテン語の *secare* 起源の *scier* が存在していたが、次第に *couper* が使用域を拡大していき、*scier* は「ノコギリで引く」の意味に限定されていくことになる。

couper はこうしてフランス語の中で「切る」という広い意味を担っていくわけだが、液体を「切る」という言い回しは、フランス語話者にとってやはり奇妙に感じられるようである。RH はトランプを切るという意味の用法（17世紀）とともに、この用法をかなり遅く派生した用法（19世紀初頭）と推測し、当然そこから派生した名詞 *coupage* 「混合」はさらに後であるととしている¹³。

しかし1771年出版の *Trévoux* の辞典¹⁴ およびそれよりもさらに以前、1718年に出版された *Académie Française* の辞書¹⁵ にもこの用法は既に記載されている。別の中型辞典 *Lexis* は、*couper le vin* は1400年ほどに誕生した用法¹⁶ と述べている。

また、ワインの専門的な事典によると¹⁷、*couper un vin* は初め15世紀「あるワインに度数の薄いワインを混ぜることで、和らげ、緩和する事」を意味した。今日では「あるワインを別のワインと混合する」の意でこの動詞を使用する」とある。

要約すると、現在テーブルワインなどで産地の違う複数のワインを混ぜることが常識になっており、これを *coupage* と呼ぶ。この *coupage* は *couper le vin* から派生した名詞である。*coupage* には水で薄めるという元々の意味は消滅している。*coupage* は一般ワインに乱用され、産地の異なるワインを混ぜ合わせるという悪いコノテーションを持ったため、それを避けるために上質ワインには *assemblage*（アッサンブラージュ：同一産地の複数のワインのブレンド）が用いられるようになった。したがって、本論では *coupage* の今日的な「ブレンド」の意味では19世紀初頭から使われ始めたが、それ以前（15世紀）からすでに *couper* は濃い液体（特に酒）を「薄める」の意味で使われていたという見方をとることにする。ワインは古来非常に濃く、薄めなければ飲めないものであった。近代におけるワインの商

業化、品質管理など言語外的な要素がこの語彙の歴史に影響しているだろう。名詞の *coupage* 「(酒などの) 混合」は初出が1836年で、動詞から派生したと見なすことが出来る。その結果 *coupage* という名詞に引きずられる形で今日 *couper* に本来なかったブレンドの意味が逆注入されているのである。最終的に、この語彙の歴史から確認できることは、元々 *couper* は切るの意の *couper* と別の動詞ではなく、同じ動詞がこのような異質な意味「薄める」を歴史的な元の意味「分割する一撃」との連続性の中で構築していることである。

つまり語源的に *couper* は *coup* から派生しているが、ここには「切断」という意味はどこにも含まれていない。そこにあるのは「衝撃を与える一撃」というほどの意味だけであり、対象の分割はその一撃の結果にすぎないのである。この語源は *couper* の本源的な意味を理解する上で示唆的である。対象に変質を引き起こすほどの力が「衝撃を与える一撃」ということだからである。またその場合、対象が変質に対して「抵抗」しているという面も指摘できる。その「抵抗」を打ち消すほどの力である故に「衝撃的な一撃」なのである。

Couper un liquide が、本源的には「抵抗する液体に一撃を加えることで、質的な変化を引き起こす」と考えれば「薄める」という意味も説明できる。濃い酒は薄められることに対する抵抗と見なすことが出来る。この抵抗力を打ち破って変化を引き起こす力として、水ないし薄い酒の追加を考えることができる。

このように見ると、*couper* の FS は (仮に) 以下のように定義することが出来る：

- (抵抗力のある) 対象が存在する。
- 非常に強い一撃が行使される。
- 対象に質/量的な変化が引き起こされる。

これはあらゆる使用を超えての*couper*のアイデンティティの定義と見なしうる。このFSから、組み合わせられる目的語の名詞（及びその他の要素）との相互作用を通じて、意味が創出される。一撃の結果は何に一撃を加えるのかによって変わりうると考えられる。それが木材であれば、切断することになるだろう。しかし、皮膚のようなものであれば、切り傷を負わせるほどの意味になる。話の流れであれば、流れを中断するという意味になる。

目的語として*couper*は「抵抗力のある」かつ「質／量的な変化を引き起こしうる」対象しか伴い得ない。これがコテキストに対する制約である。液体に対して、濃いという性質を要求するのもこの抵抗力のためである。濃い霧とは共起し、泥とは共起しないのも（ラングのレベルで）前者には抵抗力があり後者にはないと判断されるからである。

ところでトランプのような対象においてこの「抵抗力」と「質／量的な変化」はどのようにとらえればよいだろうか？ トランプとは53枚の秩序付けられたカードである（カードには体系があり、4種類の印（スペード、ダイヤ、クラブ、ハート）と1から13までの数字が振られている）。この体系的な秩序性を混沌（これを目指すことがカードを*couper*することの意味である）に対する抵抗力と見なすことが出来る。質／量的変化とは、*couper les cartes*の場合、秩序から混沌への変化である。

以上の説明からも予想できるように、ワインを*couper*する場合、「薄める」というのは、*couper*本来の意味には含まれておらず、意味の結果でしかない。本質的に*couper*は、濃い液体の抵抗力に対し、質的な変化を起こしうる一撃、この場合「他の薄いワインや水の添加」、の行使があったことを意味するにすぎない。その結果の質／量的な変化が希釈という結果となる。この場合、後に「ワル」の分析で見るとは異なり、比率に対する厳密性は要求されていない。あくまでもワインやウイスキーの濃さを抵抗力と見なし、それを変化させるだけの力の行使が言われているにすぎない¹⁸。

4. ワル

序で述べたように、*couper le vin* というフランス語の表現の日本語に相当するのは「ワインを（水などで）ワル」であった。今度はこの「ワル」の意味を含む日本語の「ワル」の意味の多様性を見てみよう。「日本国語大辞典」（小学館）の「ワル」の項には次のような説明がある¹⁹。

- 1 力を加えて、二つまたはいくつかの部分に分離させ、全体の完結性を失わせる。
- 2 事柄の全体を二つまたはいくつかの部分に分ける。
- 3 割り算を行う、除する。ある数がほかのある数の何倍に当たるかを知る。
- 4 事柄を分けてすじみちをたてる。
- 5 ある液体に別の液体をまぜる。多く食品で、もとの液体の味を薄めたり和らげたりすることをいう。古くは、加えるものを「水で割る」のように言ったが、現在では「水で割る」が普通。
- 6 ある範囲の外に出る。切る。底を割る。
- 7（「新鉢（あらばち）を割る」から）処女を犯す。
- 8（相撲で「腰を割る」の形で）足を開き、膝を曲げ、体をまっすぐにした姿勢で、腰を低くする。
- 9 手形を割り引く。
- 10（自動詞的に用いて）潮が引く。（潮がワル「日葡辞書」）

上に挙げられた10の意味のうち、1は物について、2は事についての言明であるという違いはあるにせよ、1と2が日本語の動詞、「ワル」の中心の意味と考えられるであろう。すなわち、分離／分割の意味である。3は数学などの特殊化した意味。4は「事分け」など、慣用句における意味である。5は我々が関心を持つ用法（液体をワル）に相当する。6も興味深い例で、キルにも見いだされる、分割、破壊を表す動詞が、量を表す補語をとる場合で、「以下である」という意味になる用例である。7, 8, 9はいずれも慣用句である。10は現代語では少なくとも使われない意味である。出典から17世紀の用例であると考えられ、現代語の用法を考える場合に除外できると考えられる。

従って、この動詞の多義を説明する際に、考えなければならない事は、

1, 2で見られる分割の意味が、5の液体を「薄める」という意味と、6の「以下である」(例:投票率が30%をワル)という意味²⁰とどのようにつながるのかという事である。

5の意味で興味深いことは、「ワル」が「ウスメル」²¹とは完全に交換可能ではない点である。「ワル」は対象が液体の場合にしか使用できない。例えば、「この書き方は、論文の論理性をウスメル」の「ウスメル」は「ワル」で置き換えられない。「ワル」は従って、本来的に「ウスメル」という意味は持っておらず、ある環境と組み合わせられた場合にのみ、その意味を持つ。

「ワル」という行為から、母語話者の直感に先ず最初に浮かぶのは、対象を均等に分けることであろう。ワリ勘や数学のワリ算に「ワル」が現われるのはこのためである²²。「卵をワル²³」と言う時も、殻を二等分するイメージがある。この場合、「*卵をキル」とは言わない。「何割引」という場合も、比率の問題が浮上する。「一ワリ」、「二ワリ」という場合、明らかに比率の問題であり、このように外部の文脈から比率が導入されない場合、ワルは総じて二分を意味している。

この割合という観点から、「液体をワル」は説明することができる。すなわち「ウイスキーを水でワル」とは、水とウイスキーが一定の比をもって構成されることを意味する。ウイスキーを割る場合、大抵はウイスキー1に対し水1ないし2などというように比率が定められており、水を加える時には、この割合に対する厳密さが要求される。「水をソソグ」、「水でウスメル」、「水をマゼル」などでは割合の意識はない。この割合への厳密さの要求こそ、この文脈で「ワル」が選ばれる理由なのである。また、割合を得るために、液体同士であることが重要である。「コーラ割り」などは可能であるが、氷を加えても、「*氷割り」とは言わない。合せるもの同士は同種の物質が要求される。

しかしまた他方で「*コーヒーを水で／ミルクでワル」などと言えないのは、この場合、割合への厳密さが要求されないからである。加えられる液体はコーヒーに対しはるかに少ない。ここでは、薄める事のみが問題

で、ある比率で混ぜる事で新しい飲み物を作り出す目的はない。この点が、先ほど見たフランス語の *couper* との違いである²⁴。フランス語の場合は、語源から確認したように、薄めるという意識は強いようであり、元来、比率に関する厳密さは必要とされていなかった。近年 *coupage* (クパージュ) という言葉が誕生するに至り、ブレンドの割合が問題になり、比率に対する厳密さを要求する、「ワル」との類似が高まったと考えられる。

以上見たところから、「ワル」の FS は (仮に) 以下と定義できる：

- 目的語 (完結性のある全体) をその部分の集合に還元する。
- 全体と部分の比率 (1 対 2 ~ ∞ ²⁵) は文脈から (あるいはデフォルトで) 導入される。
- 質/量的な変化は伴わない。

ここでは本質的に質/量的な変化は起きない。「ワレ」た後にも全体の完結性が失われるだけで、断片としては、割れる前と同じ物体が存在することが含まれる。対象に対して、この FS が制約を加える。すなわち、質/量的な変化なしに、分割が可能である対象を要求するのである²⁶。

「風船をワル」、「ガラスをワル」においては、少なくとも割合の概念は明確に現れてはいないと言える。この使用では「全体の完結性を失わせる」という意味が全面に出ているようである。またこの場合、対象が薄いことも必要条件である。「ワル」対象は、薄くなければならず、わずかな力が (瞬時に) 全体に波及し破壊が進行することが必要である (「コップをワル」、「壺をワル」等も同様)。この薄さと完結性の喪失は、ある割合で分割することの結果面に焦点をあてた意味であるように思われる。この場合、「ワル」という行為に、対象の破壊というよりも断片化が感じられるのである。「ワル」行為の後に得られるのは、破片でありそれはもとの対象の部分であるから、寄せ集めれば全体を再構成できる。すなわち「ワル」場

合、「キル」について後に見るのと違い、対象の「質／量的変化」を伴わないのである。あくまでも完結性を持った全体からその断片の集合へという状態の変化はあるものの、対象の全体は変質せず保存されている。

「ウイスキーをワル」の場合は、物理的に「質／量的な変化」が引き起こされるが、これは「ワル」行為の結果として現実世界で引き起こされたものでしかない。「ウイスキーを水でワル」とは、本源的にはウイスキーと水とを全体とし、その両者が一定の比率で再構成された新たな飲料を獲得することである。両者とも液体で物理的に混ざり合うために、水で薄められたウイスキーが得られるが、「ワル」自体には薄めることは含まれていないのである。

しかしながら、割合の考え方で、説明しにくいのが「投票率が30%をワル」などという場合である。この場合、「以下である」「達しない」という意味だが、次に見る「キル」にも同様の表現がある（「投票率が30%をキル」）。この表現は、何故分割や切断を表す動詞が、このような意味になることがあるのか、「キル」を考えた後に再び考えてみたい。

5. キル

キル²⁷について『日本国語大辞典』（小学館）は以下の説明をする。

1-1 つながっているもの、続いているものなどを断つ。またついているものを離す。1-1-1 刃物などで、一続きのものに力を加えて分け離す。1-1-2 特に、刀で傷つけたり、また、殺したりする。1-1-3 結びついているものや閉じているものを離したり、開けたりする。また、つながっている関係や継続する事柄、続いている気持ちや話などを断つ。1-1-4 あるものごとをあばいたり、批判したりする。1-1-5 いき（息）を切る。

1-1-6 約束を破棄する。1-1-7 辞職させる。解雇する。1-1-8 入場者の切符を確か

め、はさみを入れる。1-1-9 水や空気などの中を分け入るように勢よく進む。また、続いている列や、道、線、流れなどの中途を横に渡って通る。横切る。1-1-10 道などを通れないように横切る。1-1-11 双六(すごろく)で、相手のじゃまになる所へ石をやる。また、囲碁で、相手の石が連絡しないようにじゃまをする。1-1-12 トランプやカルタ、花札などで、同種の札がつかないように、また、数が順序よく続かないようにまぜ合わせる。1-1-13 トランプやカルタで、切る札を使う。1-1-14 部屋や土間の一部を掘り下げて、炉やこたつを作る。また、部屋の一部をくりぬいて、窓をとりつける。1-1-15 手術をする。切開して幹部をとり除く²⁸。1-1-16 振ったり、しぼったり、ふいたりして水分を取り去る。1-1-17 (量目の一定した金銀貨がなかった時代に、竿金(さおがね)、竹流金(たけながしきん)などを切って使っていたことから)両替をする。1-1-18 (綴られているものを切り取って使うところから)手形や伝票などを発行する。

1-2 物事に区切りをつける。1-2-1 時間や時期を限定する。期限を決める。1-2-2 物事を決定する。1-2-3 きりかける。1-2-4 事柄に、ある基準で区切りをつける。時期や数量を限定する。1-2-5 ある基準の数量以下になる。割る。1-2-6 株式取引や商品の清算取引で、損失勘定になった客が、証拠金の追加をしないので、取引員が手じまいして整理する。

1-3 きわだつような動作をする。1-3-1 勢いのよい、きっぱりした口ぶりや様子などをする。1-3-2 特に歌舞伎や能で、ある目立つ表情や動作をする。1-3-3 まっ先にある動作をする。1-3-4 テニスや卓球などで、玉に回転を与えるように打つ。カットをする。1-3-5 ハンドルや、かじなどで、進む方向を変える。1-3-6 手である決まった文字や形を描く。

1-4 動詞の連用形に付けて補助動詞として用いる。1-4-1 すっかり...し終える。完全にすます...し尽くす。1-4-2 十分に...する。ひどく...する。1-4-3 きっぱり...する。1-4-4 途中で...することをやめる。ヨミキル(日葡辞書1603-04)...

上の記述を見るだけでも、「キル」の意味がどれほど増殖しているの分かる。またこの語の使用が広まるに伴い、かなりの慣用句や専門用語化し

た例も含まれているようである。しかしながら、この多様性を通じて、「キル」の普遍的な意味として一つの特徴を指摘できる。「キル」のFSを、(仮に)以下で表そう：

- 集中された力を約束する特殊な（鋭利さをもつ）器具あるいは技術、または力が（明示的あるいは暗示的に）存在する²⁹。
- 目的語はそれ自体、自らの質／量的な変化のために普通の力ではなく集中された力の行使を必要とするほどの抵抗力を持つ。
- 目的語に集中された力が行使され、その結果、質／量的な変化が引き起こされる。

例えば、テニスなどで「球をキル」というと時（1-3-4の意味）に、現れるのは対象の切断ではなく、この集中した力という側面である。球技において玉は破壊される前提で存在せず、普通に加える以上に集中された力が行使された結果、玉を回転させるという意味が現れるのである³⁰。

1-3-5の「ハンドルをキル」という場合も、ハンドルは回転し、車輪にその動きを伝える前提があるので、急に方向転換するという意になる。球技の「キル」と同じで軸を中心とした回転運動が生じるのである。ハンドルを「マウス」よりも「キル」の方が急激な力の行使を感じさせる。また1-3-2の「見栄をキル」、「トンボをキル」なども「集中した力の行使」がある。従って以上の例は、必ずしもメタファー的な言い方とは考えられない。目的語が変わることで、キルの担う意味が異なってくると考えられるのである。同様に「雲をキル」というときも、破壊が生じないからといって、メタファーとは考えられない。「抵抗力」のある濃密な雲に対し、主語の「集中した力の行使」が認められるからである。

「木をキル」など、普通の対象に対しては、「集中した力の行使」は、対象の破壊を引き起こしうる。しかし、多様な用法を見て行くと、最終的に「キル」には、本質的に切断するという意味は含まれていない。本質的なもの

は、「集中された力の行使が引き起こす対象の質／量的な変化」であり、それが様々な目的語の性質に応じて意味を変えるのである。

前述の辞書には取りあげられていないやや特殊な表現だが、相撲の決まり手には「押しキル」、「寄りキル」など、相手を土俵から出すことときに「キル」が使用される。これらは複合動詞としての使用だが、「キル」は前件が修飾する本動詞として機能している。この「キル」の場合も、想定された場所から、他の場所へ出すことを意味し、「抵抗力」とそれを打ち破る「力」が存在している³¹。

自動詞「キレル」は、最近使用される意味では、堪える心、抵抗力をもって、平常心を保とうとする抵抗力を、変質させるほどの集中された力の行使が加わり、ある一点を境として別の精神状態へ変質することを表している。名詞形の切れ、切れ味などでも「キル」の持つ不連続性が現れている。

また、この「キル」のFSによる把握は、上の1-4-1すっかり...し終える。完全にすます。...し尽くす。1-4-2十分に...する。ひどく...する。1-4-3きっぱり...する。(1-4-4の意味は現代語では消滅しているので除く。) という意味である補助動詞としての「切る」の意味を説明できる。「橋を渡りキル」「役になりキル」などに顕著な「完全に」の意味は、この「集中された力の行使」が「キル」が副詞化されることで、前の動詞の様相を限定する機能を付与され、「渡る」、「なる」などに適用されたことに由来すると考えられるのである。

最後に、錐(きり)という道具は、「キル」という動詞から派生した名詞と考えられるが、ハサミでも刀でもなく、一点を突き刺し、穴をうがつ道具を表す事実は注目に値する³²。なぜなら、一点に集中した力を行使するという点で、動詞「キル」の本義と一致すからである。

また、「キリキリ胃が痛む」などという場合、動詞「キル」の連用形を量語にした擬態語であるが、これも、点的に突き刺すような痛みをいうのである。集中された力が一点に加わる意味がここにも観察できる。

6 今後の課題

「キル」が量を表す目的語を伴う場合の「以下である」という意味、「1ドルが100円をキル」、「100メートル走で10秒をキル」の場合はどのように説明できるであろうか。この使用は特殊な文脈であり、当然「100円」や「10秒」は普通の意味で「キル」ことは出来ない。

考えられる事は、他の表現と比べて、これらの表現は強くモダリティに関わる表現であるということである³³。これらの表現では本来、前提として期待されている基準に到達しない、下回るという価値判断的なニュアンスを持つ。

このモダリティに関係する「キル」の例にはまた、「ワル」にも近い表現がある。「1ドルが100円をワル」とも言えるからである³⁴。この両例に対して、FSと目的語の性質だけでは説明しにくい。おそらくは、モダリティの側面からFSに何らかの影響が加わっていると考えられる。この場合、「100円」「10秒」は何らかの基準値として機能しているが、「集中された力」が加わる対象ではないようである。むしろ、「1ドル99円」や「100メートル走9秒85」などの出現した事実を前にして、「100円」や「10秒」と言う「壁」すなわち強い抵抗力を持って突破を阻むものが、この集中された力の行使によって突破されたという印象がある³⁵。品詞の属性がFSを変形することは「キル」の補助動詞としての使用の例とともに見たが、モダリティにもそのような影響力があるのかどうか、実例に対する観察を増やすことで、今後考察を深めたい。

また、例えばこの「キル」のFSは、類似する動詞「ツク³⁶」などどのように差異化できるだろうか。「突き」が器具ではなく「突く」行為を表していることから、モノ志向の動詞（キル）、コト志向の動詞（ツク）の区別を建てるべきかもしれない。しかし、キリも、「斜めギリ」、「キリ込み」などのように行為を表す場合もある。歴史的な偶然という要素も排除できないであろう。

7 結論

本論は最終的には動詞に限らず言語内の意味を担いうるあらゆる単位の意味的な多様性を計算可能にする理論の構築を目指す研究の一端となる³⁷。その研究プログラムにおいて、我々は意味現象を複合的な体系と見なす考え方に組する。複合的な体系とは、複数の異質的かつ相互作用を行う要素から構成された集合であり、その場合、意味は創発性(émergence)によって特徴づけられる。

couper、ワル、キルという三動詞の分析で見た通り、目的語に置かれる名詞は、動詞の意味構築に強く影響するコテキストである。本論では典型的な他動詞とされる破壊動詞に属する三動詞が、いわば想定の外にある液体や量を表現する語を目的語に伴う場合、その特殊な性質から影響を受け、語彙的な意味と関連づけにくい意味を構築することを示した。しかし、それだけで全ての多義性は説明できず、コテキストすなわち「語彙的」コンテキストだけでなくモダリティのような「状況的な」コンテキストまでが動詞の意味構築に関与していると推測せざるを得ないだろう。

あらゆるコンテキストで*couper*をキルで置き換えられないことから明らかに、ある言語から別の言語への翻訳において、ある語彙に別の言語のある単語(等価語彙)を機械的に結びつけるのは危険である。個別言語の中である単語は置き換え不可能の独自性を有しているからである。その独自性は多様な使用と不可分の関係を持つ。多義的な動詞のアイデンティティは抽象的なパラメーターの束としてのFSで定義することが、多様な使用とその結果生じる多義を経済的に説明するには有効であるように思われる。またこの方法は外国語を学習する際、とりわけ多義的な基本動詞の中心となる意味を認識する際にも有効な方法であると思われる。

註

- 1 フランス語の動詞 *couper* は『スタンダード (大修館)』、『クラウン仏和辞典 (三省堂)』、『ロワイヤル (旺文社)』、『ラルース (白水社)』いずれの辞書でも、その第一の訳として「切る」という動詞が挙げられている。
- 2 この用法は英語では *to blend, to dilute* と訳されており、英語ではいわゆる破壊動詞は現れない。(Cf. *Harrap's New Standard Dictionnaire Français-Anglais* : "to blend, to water down, dilute wine", *Robert Collins Dictionnaire Français-Anglais* : "to dilute, add water to, to blend, vin coupé d'eau, wine diluted with water.)
- 3 ここでは「切る」で *couper*、キルなどを含む、対象を切断する概念を表すことにする。
- 4 Saussure, F de(1972 [1916]) *Cours de linguistique générale* における意味で使用している。
- 5 Maurice Gross (1968,1986) *Grammaire transformationnelle du français, 1. Syntaxe du verbe, cantilè* 等を念頭においていると思われる。Gross が米国で学んだ生成文法派 (Harris, Chomsky) の意味に関する立場も同様にここに属するであろう。
- 6 いわゆる後期の Wittgenstein、*Philosophical Investigations* (1936-49)[Basil blackwell 1953-1958]の時期を指すと思われる。
- 7 (iii) soit la signification fondamentale d'un verbe polysémique est essentiellement de nature cognitive, les significations étant décrites au moyen de schèmes et engendrées à partir d'un « invariant de signification » par les relations de dépendance explicites. (Desclés, *ibid.*)
- 8 *Théorie des Opérations Prédicatives et Enonciatives*. (Cf. Culioli, 1990-1999)
- 9 この概念について特に Franckel (2002)を参照。
- 10 強いて訳せば「歪形」。Cf. De Vogüé S. & D. Paillard (en préparation) *Altérité et déformation. Théorie des repères et structuration d'un dire*, Ophrys, Paris.
- 11 状況的コンテキストに対し、言語的コンテキストを指す。(Cf. Guimier éd. (1997)).
- 12 本論の「キル」の記述で、この動詞の補助動詞としての使用において、動詞の副詞化の具体的な例を取り上げる。
- 13 Le sens de «diviser» (un jeu de cartes) apparaît au début du XVIIe s. (1606): celui de «mélanger (un liquide)» semble plus récent (antérieur au début du XIXe s. où est attesté le dérive *coupage*.) (RH) (和訳：(一組のカードを)「分割する」の意味は17世紀(1606年)に現れる。「(液体)を混ぜる」の意味はより最近(派生語 *coupage* (混合)が確認されている19世紀初頭以前)であると思われる。)

- 14 Couper du vin, c'est mettre, mêler plusieurs sortes de vins ensemble. Vina miscere (*Dictionnaire universel, Français et Latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trévoux, Nouvelle Edition* (1771), Slatkine Reprints, Genève, (2002) (和訳: couper du vin とは複数のワインを一緒に合わせ、混ぜることである。)
- 15 Vin coupé, du vin meslé avec d'autre vin. (*Dictionnaire de l'Académie française*, 1718) (和訳: Vin coupé、別のワインと混ぜたワイン)
- 16 Couper. V. tr. (de couper 1; 1400) couper une boisson, la mêler d'eau. Coupage n.m. (1836). 1. Mélange de divers vins, pour unifier la récolte d'une cave ou obtenir un vin mieux constitué. 2. Mélange d'eaux-de-vie de degré alcoolique différent. 3. Addition d'eau où un liquide quelconque dont on veut diminuer la force. (couper, 他動詞 (couper から1400年に派生) 飲み物を割る、水と混ぜる。Coupage 男性名詞 (1836年) 1. 収穫を均一にするため、またはより良い組成のワインを作るために様々なワインを混合すること。2. 異なる度数のウイスキーを混ぜること。3. 強さを弱めたい何らかの液体に水を加えること。)
- 17 Couper un vin (15e siècle) a d'abord signifié «le tempérer, l'atténuer en le mélangeant à de l'eau ou à un vin moins fort». Aujourd'hui, on emploie plus souvent ce verbe au sens de «mélanger un vin à un autre»: c'est un *coupage* (19e siècle). On appelle pudiquement *vin d'opération* un vin coupé. On réserve d'ailleurs le terme de *coupage* aux vins ordinaires, alors qu'on parle d'*assemblage* pour les vins fins. (Chatelain-Courtois, M. *Les mots du vin et de l'ivresse*, Belin, 1984) (和訳: (15世紀)couper un vin は「薄める、水やより度数の弱いワインを混ぜることで緩和すること」を意味した。今日ではしばしば「あるワインを別のワインと混ぜる」の意味で使う。つまりクバージュ (19世紀) である。割られたワインのことを控えめに操作されたワインとも言う。またクバージュという用語は一般的なワインに使用し、上質なワインにはアッサンブラージュの語が用いられる。)
- 18 後に明らかになるように、「ワル」においても希釈の意味は結果であり、従って *couper* と「ワル」の一部の用例での一致は意味効果の面での表面的な一致と言うことが出来るだろう。ちなみに、ラテン語では、ワインを薄める場合、*diluere* や *temperare* を使用したようである、後者の場合「ワル」に近く比率、割合に基づく分割であり (*gamme tempérée* (平均律音階)、*clavier bien tempéré* (平均律クラヴィーア))、深い部分で「ワル」と類似しているのは興味深い。
- 19 「ワル」の等価語彙を現代のフランス語であえて探すと *diviser* に相当するで

あろう。

- 20 これはフランス語には見られない。
- 21 動詞「ウスメル」はおそらく、「ウスイ」という形容詞から派生したと考えられる。しかし「ワル」には相当する形容詞は存在せず、「ワレ鍋」など連用形を接頭辞的に使用し名詞を限定するのみであろう。この場合、*「ワレ酒」のような用法は存在しない。
- 22 フランス語でも同様に「分割」を表す *diviser* を使う。
- 23 仏語では「壊す」の意の *casser* を使う。
- 24 仏語では類義語に、*mêler* (混ぜる) という言葉もある。日本語でトカスは、二種類の液体には使えない、固体を液体にトカスのである。
- 25 2の例：卵を割ル、割り箸を割ル。∞の例：ガラスを(粉々に)割ル。
- 26 名詞形の「時間割り」「譜割り」なども均等な割合に基づいた配分を意味する。
- 27 状況に応じて、切、伐、斬、裁、剪、刃、刊、断などの字が当てられるが、ここでは「キル」で代表する。例えば「斬る」などと書くとき、1-2の「特に、刀で傷つけたり、また、殺したりする」という意味になるであろうが、同じ音韻表示として、同一の動詞として取り扱う。
- この訓読み特有の書き分けは、日本語が特殊という訳ではなく、文字を持つ言語は、筆記のレベルで曖昧性を排する事もある。例えばフランス語でも、現在分詞と形容詞の範疇帰属を明示するために発音が同じ単位を書き分ける：*fatigant* (「疲れて」現在分詞) / *fatigant* (「疲れさせる」形容詞)。
- 28 手術の文脈でのキル「患部を切除する」は、フランス語の *couper* の場合でも観察できる意味だが、「辞職させる」の意味とともに、目的語を省略した婉曲表現に当たると思われる。
- 29 このFSによる特徴付けは、以前に見た *couper* のFSと非常に共通点が多い。このために両者は等価語彙と見なされる事が多いのである。違いは *couper* の場合「衝撃的な一撃」であり、「キル」の場合「集中した力」であることである。「集中した力」は名詞の「錐(キリ)」補助動詞の「～シキル」を説明するために必要である。
- 30 興味深いことに、フランス語の *couper* でも同様の用法がある。*couper une balle (de tennis) : la frapper par-dessous, de haut en bas, de manière à lui donner un effet ralentissant sa course et diminuant son rebond.* (GR) (和訳：(テニスで) ボールを切る、球の速度を抑え、バウンドを減少させる効果を与えるために上から下

へとボールの下部を打つこと)。

- 31 この意味の「キル」は現代語では複合動詞の中でしか使用されない。
- 32 フランス語では、*foret, perçoir*.
- 33 この種類の使用での「キル」に観察されるモダリティに関して、森田良行は「また、伸び広がっていく長さや範囲を途中で断つ意識は、ある限界や基準に達する以前に打ち切る、終了する意識となり、さらに「基準に達しない」もしくは「基準とする分量を割る」の意識ともなっていく。これにはマイナス評価の場合とプラス評価の場合とが見られる」(森田良行『基礎日本語辞典』)と述べている。
- 34 「したがって「割る」には必要なのにそれに満たないと言うマイナス評価の気持ちが伴う。」(森田良行 *ibid.*)
- 35 この突破と言う概念は、相撲の「寄りキリ」等で土俵内にとどまろうとする力を超える力が加わり土俵の外に出す、という場合の「キル」の用例と共通点があると思われる。
- 36 「着く、付く、就く」など、「突く」とは通常区別されているが、語源的には同一であると考えられる。
- 37 以下を特に参照：Victorri & Fuchs (1996), Franckel éd (2002), Vogüé & Camus (2004)

参考文献

- Culioli, A. (1990-1999) *Pour une linguistique de l'énonciation*, Tome 1-3, Ophrys Paris.
- Desclés, J.-P. (2005) : «Polysémie verbale, un exemple : le verbe *avancer*», in Soutet éd. (2005).
- Franckel, J.-J. (2002). Introduction à «Le lexique, entre identité et variation», *Langue Française*, 133, février 2002, Larousse, pp. 3-15, Larousse, Paris.
- Franckel, J.-J. éd. (2002). «Le lexique, entre identité et variation», *Langue Française*, 133, février 2002, Larousse, Paris.
- Guimier, Cl. éd. (1997) *Co-texte et calcul du sens*, Presses Universitaires de Caen.
- Soutet, O. éd. (2005) : *La polysémie*, Presses de l'Université Paris-Sorbonne.
- Rey, A. dir. (1985) : *Le Grand Robert. Dictionnaire de la Langue Française*, Editions Le Robert.
- Rey, A. dir. (1992) : *Dictionnaire historique de la langue française*, Editions Le Robert.
- Victorri, B. & C. Fuchs (1996) *La polysémie, construction dynamique du sens*, Hermès,

Paris.

Vogüé, S de & R. Camus éd.s. (2004) *LINX* No 50 (2004-01) *Variations sémantiques et syntaxiques des unités lexicales : études de six verbes français*, Université Paris X